

亡友月照十七回忌辰の作（西郷南洲）

相約して淵に投ず後先無し

豈に凶らんや波上再生の縁

頭を回らせば十有余年の夢

空しく幽明を隔てて墓前に哭す

相約投淵無後先 豈圖波上再生縁
回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

解説 南洲は月照の十七回忌供養を営んだ時の作。

語釈 ※月照 京都清水寺成就院の僧。熱烈な勤皇家で、南洲の同志で、幕府から厳しく探索されていた。兩人の護送の途中、錦江湾の船中から相抱いて入水したが南洲は蘇生し、月照は絶命した。※忌辰 命日。※相約 約束して誓う。※投淵 薩摩の海に投身。※後先 あとさき。早い遅い。※豈 凶 どうか、予想しないことである。反語の用法。※再生縁 自分だけが蘇生するという因縁。※回頭 思いかえす。※幽明 あの世とこの世。※哭 声をあげて泣く。

通釈 南洲、月照の兩人は約束して薩摩の海の深みに身を投じたのは後先ではなく一緒であった。ところが、前の世からの因縁により、南洲一人が再び生き返ろうとは。思い返せば早くも十幾年前のことになるが、昨日のことにように生々しく思いだされる。むなしく幽明を隔てて、互いに二度と相見ることができない。これを思うと悲しさに堪えず、墓前に額を地につけて拝礼し、思わず声を放って泣いてしまった。